「日本語日本文学論叢」第十七号　抜刷
令和四年二月十二日　発行

明治歌壇と有賀長隣
銅板版『改正増補　和歌麓の塵』

管　宗　次

明治歌壇と有賀長隣

銅板版『改正増補　和歌麓の塵』

管　宗　次

一、　有賀長隣と有賀家

大阪市立大学所蔵の森文庫の旧蔵者、森繁夫が、その著書『人物百談』[1]のなかで、「有賀長伯家の代々」として有賀（あるが）家は上方における堂上派地下歌人の名家であり、近世初期から幕末明治初期にいたるまでの歌学の家として、命脈を伝えたことを述べている。

その一節を次にあげる。

浪華歌壇を論じて逸すべからざるは、有賀一家の人々である。有賀家の祖は長伯であり、長因・長収・長基・長隣を経て、彼の国際法の権威者、文学博士法学博士長雄、其弟にして実業界の重鎮たりし長文に至るのである。[1]

さらに、

歌道系図は、堂上派以外には、羽倉春満を祖としそれから真淵、真淵から宣長及所謂江戸派の春海、千蔭、また宣長から出た篤胤の一派、別に清水谷家から出た香川景樹、これ等を主なる流派とするのであるが、しかし、何れも年代から云えば其流祖は若いもので、独り大阪の有賀家は遠く足利期から、すなはち実隆・実枝から伝授が続いてをるので、地下の歌人としては外に其類がなく、伝統を尚ぶ当時に在ては、歌壇の誇りであったのである。

この有賀家歴代については、『関西黎明期の群像』[2]に、「有賀長隣・種痘活動を助けた旧派名門歌人」として、まとめたが、

有賀長隣が幕末期だけではなく、開化期に和歌旧派で華やかな活動を続けている。

地下歌人の歌学と文明開化期の和歌を繋げて、旧来の書籍にも手を加え時代に即した歌書に改めたこと、その歌書も銅板という、新時代の印刷印行にかけるなど、当時の旧派歌人の活動とはいかなるものであったのか述べていきたい。

二、有賀家と歌書

有賀家は、有賀長伯を祖とする歌学の伝承があって、長伯は、平間長雅の門人、日野弘資の門人にして望月長孝に古今集をはじめとする歌学の継承を受ける。いつごろからかは、不詳ながら、「有賀家の七部書」と称するものがある。有賀長収のころのことかとおぼしく、その七部書でもっとも流布した歌書『和歌麓の塵』の発刊に長収があたっている。

和歌の作法書として『和歌麓の塵』は、非常に流布した版本で、奥付も寛政年間の初刷から版を重ねて明治刷の版面の疲れた本も多い。

有賀長伯は、有賀歌学の祖となるわけだが、『国書総目録』をみると二十八点もの編著、著述があげられている。和歌作法書が多く、和歌初心の入門書、歌会参座に便利なものが多い。

「有賀家の七部書」と称されるものは次の七点である。

・『和歌世々の栞』
・『初学和歌式』
・『浜の真砂』
・『和歌八重垣』
・『歌林雑木抄』

・『和歌分類』
・『和歌麓の塵』

で、この七点を「有賀家の七部書」と世に称して、和歌学習段階と習得手順毎の歌書らしくみせたのも、有賀長収と思しい。『和歌麓の塵』の編者は、有賀長伯で、発行にあたったのが長収である。

これらが、松尾芭蕉の七部書に倣い、和歌学習の段階で、啓蒙的なレベルから学力に従い、歌書を入手することになるが、物学びの常で、和歌実作に簡便で初心者向きの『和歌麓の塵』の一点さえあれば、大抵の事足れりという内容の歌書でもあった。芭蕉七部集は、佐久間柳居が、蕉門の俳諧連句選集の選集七部十二冊をまとめたものであるが、連句選集につけた呼称を、歌書の呼称に倣うあたり、卑俗通俗の地下歌学の普及化には手頃な名付けといえる。

芭蕉七部集の編者、佐久間柳居は『五色墨』運動の中心人物であるが、その活動である「七部」を、我が歌学にも名を冠せるあたりに、有賀家のしたたかさも感じさせる。

『和歌麓の塵』の有賀長収巻頭序文を次にあげる。

歌よまむと志す童蒙の詞の林をたつねたらむにあまり繁きは分にとはれて見るにわつらはしく又すくなきはたらすして心ゆかさるへしさりとてしをりなくては一歩もすゝみかたくたま〳〵いみしき趣意をおもひ得ても其心をうつすへき詞をしらされは空しく打をきぬへしこゝに祖父長伯いまそかりし世うゐまなひのたつきにもと歌のむしろにたつさへて出てみせもし見もし手ならされし小冊あり年頃わかふところに伝へもてるを親しくせる友の梓にちりはめてよとしゐて乞るゝにいなみかたけれは書舗の何かしにあつらへつくるつゐて猶見やすからんために詞の長短をわかちかつ證歌を補ふかゝれは切磋功つもりて天空たな引くまておひのほれる如くきれの堺にいたるへき山口ともなりなんやとて麓のちりと名つくるのみ

有賀長収

享和辛酉の秋

これによって、出版にいたる経緯のあらましが察せられるが、「祖父長伯」と序文中にあげて、本の書型体裁も中本二冊、享和辛酉は享和元年、有賀長収五十一歳にあたる。

『和歌麓の塵』は、有賀家の歌書として最も知られた歌書となったのは、利用しやすい簡便さ、中本三冊（二冊本、三冊本、薄葉一冊本と体裁の異なるものがある）というコンパクトで比較的廉価、軽便な歌書であって、有賀長収の大阪地下（ぢげ）歌人の名流としての立場があってのことであろう。この『和歌麓の塵』は、この後、明治期に到るまで、有賀家の歌書の要となる。

架蔵本の版本『和歌麓の塵』の明治版（三冊本）は、袋付で

以敬斎有賀長伯著
和歌麓の塵
明治二十三年
七月刊行　　布美廼舎蔵版

と印刷されている。同書の見返しも袋と同じ版木を用いている。有賀長伯、布美廼舎蔵版を明示している。奥付は、

明治二十三年七月五日印刷
同　二十三年七月十日出版
著作者　故人　有賀長伯
京都市下京区寺町道綾小路下ル中ノ町十六番戸
発行者　川勝徳次郎

印刷者　京都市下京区寺町道四條上ル大文字町十八番戸
発売者　田中治兵衛

とある。明治中期にも『和歌麓の塵』が、長伯の名を冠して書店の棚には、並んだわけである。これらについては、「四、「改正増補　麓の塵」」で、つぶさに述べる。

三、有賀長隣と種痘

有賀長隣は、幕末期から明治期の有賀家の当主であった。長収は、先代の長因（長川）の養子で、長収のつぎの長基も養子で、長隣は長基の実子であった。

有賀長隣、文政元年六月十九日生まれ、明治三十九年十一月一日歿、享年八十九歳。号を情斎、または思継斎。和歌のほかに、蹴鞠にも秀でていたという。

国学や和歌に親しむ人は、蘭学を毛嫌いするものが多かったなかで、有賀長隣は、緒方洪庵と和歌を通じて親しく、また緒方洪庵とともに、除痘館運営にあたった種痘医松本俊平と懇意であった。④⑤

「大阪市種痘歴史」に、つぎの記事がある。

松本俊平ハ西成郡北野村東北一小村ノ住人国学者有賀長隣（長雄長文両博士父）方ヲ続苗所トシ、貧人ヲ誘致シ定日出張シテ文久二年頃迄継続シタリ、其間有賀氏貧人ノ勧誘ニ与リテ力多シト云フ

あとで述べるが、有賀長雄と有賀長文とが種痘を受けたことがわかるが、緒方洪庵の日記をみると、長隣の娘は、緒方洪庵から種痘施術を受けたことがわかる。⑥

緒方洪庵の日記「癸丑年中日次之記」嘉永六年に見える長隣の記事をあげる。

二月十八日

・有賀長隣留守に来る。二十四日初会之事申置よし。

二月二十四日

・有賀初会難波橋西照庵にて催。出席す

六月十三日

・今朝有賀娘種痘す。

八月三日

・夜有賀長隣、大田雲若来る。

長隣と同道で、洪庵自宅を訪れて昼食まで馳走になっている村井俊蔵は、除痘館運営に協力した洪庵の同志である。⑥

緒方洪庵は、蘭方医、種痘医を集めて「除痘館歌会」を催し、月並みであったようである。また、日記からは、萩原広道や久貝正典、黒沢翁麿、六人部秀香などの、和歌や歌書での付き合いが拾える。

有賀家は、幕末期さほど経済的に豊かでもなかったことが窺える。また、洪庵たちが種痘館運営に一番苦労していた「種接ぎ」に助力したのが、旧習保守的と思われがちな国学者歌人の有賀家であり、有賀の娘は洪庵自らの施術による種痘であった。

こうして、有賀家の子供たちは、明治になると東京に父、長隣とともに移住して文明開化を迎える。

四、銅板『改正増補　麓の塵』

本稿では明治期の時勢を考察するために、版本の『和歌麓の塵』後刷り、明治二十三年版を取り上げたが、明治十四年に『改

正増補　麓の塵』が「原著者　故人有賀長伯」「相続人並校正増補人　有賀長隣」として、出版されている。

当時、旧時代の書林の商規約で、版権は版木所有者であった。版権の移動は版木の売買によった。版本の『和歌麓の塵』は、「発行者　印刷者　川勝徳次郎」「発買者　田中治兵衛」で売られているが、有賀家の直接収入とはならない。

『改正増補　麓の塵』は、文明開化期の題詠に対応して和歌題の増補に、長隣があたり、新時代の機運に乗り出そうとした新時代の歌書であった。

また、『改正増補　麓の塵』の版型は、小本四冊の小本。銅板と石版は、木版整版になれた読書人には、微細文字や精緻な図版が生かせるものとして非常な人気があった。大阪では、弾琴緒が歌集出版では、つぎつぎと活版印刷での出版業務運営にあたっている。

ほぼ、同時期に、版本と増補改正の銅板本が売られていたわけである。

つぎに、『改正増補　麓の塵』の書誌をあげる。

『改正増補　麓の塵』（架蔵本）

・版型　小本四冊、銅板

・丁数　一（序文２丁、上・1丁～９０丁、９０丁）、二（下・1丁～３２丁、３２丁）三（３３丁～１１７丁、８４丁）、四（１１８丁～１８４丁、６６丁、和歌麓の塵附録１４丁、附録跋１丁）計２２３丁

これを、版本と照合すると、版本は、三冊本の場合、上（本文９６丁、９６丁）、中（1丁～８６丁、８６丁）、下（８７丁～１９６丁・１０９丁）であるが、本文の版面を、そのまま銅板の版面に起したものに過ぎない。

そして、『改正増補　和歌麓の塵』の本文の巻頭には

以敬斎有賀長伯述原著

狭々廼舎有賀長隣校正

としている。本文に対しての校異なども全くない。四冊目の「麓の塵」本文が終わった後に、「和歌麓の塵附録」十四丁は「有賀長隣著」として、「麓の塵」の著述形式を真似て、いわゆる「開化題」と「歌枕」の拡大によって増加した名所や、「文明開化」の新風俗をいかに詠むかが例示されている。また、『和歌麓の塵』は、近世初期の歌学書をもとに、まとめられているために、近世後期には、加納諸平編『類題和歌鰒玉集』や長澤伴雄編『類題和鴨川歌集』などでも、よく取り上げられる和歌題を、長隣は新たに加えることになっている。「和歌麓の塵附録」の増補に「祝之部」があって、和歌は冠婚葬祭などには、賀詞弔辞に添え、または賀詞弔辞そのものとして和歌を詠むことは、たしなみとして必修教養であった。ただし、旧弊めいた古臭いものではなく、新時代の洒落た趣向や景物を生かした言葉や詠みぶり、時代の必要に備えたという面が強く反映している。宮中の年始の御歌会に、広く庶民からの献詠をも許したことなど、和歌という文芸への参加が、新時代らしい品位を保ちつつ新時代「平民」にも相応しいものとして捉えられているかのようである。近代短歌とは展開する方向が異なることも明らかである。

証歌として例の和歌をあげねばならないが、「和歌麓の塵附録」にあがる和歌をみると、その和歌の多くが「よみ人不知」であがり、著名の歌人の和歌では、佐々木弘綱、近藤芳樹などが見える。当時として開化題の歌集で持て囃された彼らの和歌を入れぬわけにはいかなかったのであろう。

そして、有賀長隣の自作和歌と、長隣懇意の歌友や門人たちの和歌を散らすよう配分している。

「よみ人不知」としてあがる多くの和歌は、『改正増補　和歌麓の塵』を編むにあたって長隣が新たに詠んだものではないだろうか。

五、和歌麓の塵附録

次に「和歌麓の塵附録」の條にあがる明治期の和歌題をみていきたい。重ねて述べるが、すべてが文明開化の題ではない。幕末期には、「煙草」や「蟹」「煎茶」などの和歌は、もの珍しくも、珍奇な題と感じる歌人もないが、『和歌麓の塵』に、所載がないために、長隣が補ったに過ぎない。

天長節・新年宴会・天皇巡行・東京・隅田川・月か瀬・桜の宮・箕面滝・牛滝・布引滝・舞子浜・公園地・遂道（トンネル）・開拓・鉱山・温泉・鎮台・学技・洋行・貿易・説教・士族帰農・僧尼還俗・散髪・人力車・馬車・蒸気車・蒸気船・郵便・電信機・時計・寒暖計・晴雨計・洋燈（ランプ）・望遠鏡・写真・国旗・貨幣・新聞・活版・暖室炉・盆栽・挿花・茶道・煎茶・囲碁・月琴・三味線・煙草・遊行・氷売・苦熱・避暑・蟹・網船・茸狩・芸妓・娼妓・屑買・薬売

また、「祝之部」として、ことさらに、次の部立がある。

祝之部

四十賀・五十賀・六十賀・六十一賀・七十賀・七十七賀・八十賀・八十八賀・九十賀・百歳賀・婚姻祝・誕身祝（ママ）・新宅祝・開業祝・昇進祝・本復祝

「麓の塵附録」に跋を有賀長隣は添えている。

先つとし遠つおや長伯かものせしを
祖父長収か初学のためにとて麓の
塵と名つけて梓にのせし頃よりも
はやあまたのとしたちて世にくさ〳〵
新たなる事とも多くなり侍散止

ならせしもあれはこたひいにしへの
仮名にあらためて題にとり出へき物
のみならねと初学の道たとる栞とも
なりなむとおもひ出るよりを書肆の
乞にまかせてしるすのみ

明治十とせ余り
三とせの秋

有賀長隣

また、同書の奥付によって、種痘医の松本俊平が、「続苗所」とした有賀長隣の住居は、このあたりのことかもしれない。

明治十三年十一月十日　版権免許
明治十四年一月　発兌
原著者　故人　有賀長伯
相続人　大阪府平民　有賀長隣
並校正増補人　同府西成郡川崎村四百七十二番地
出版人　同　野村秀太郎
同府東区道修町二丁目六番地
発兌人　大阪平民　柳原喜兵衛　印

同府東区北久太郎町四丁目十四番地
同　　同　　前川善兵衛　印
同府東区南久宝寺町四丁目八番地
同　　同　　松村九兵衛　印
同府南区心斎橋一丁目四十六番地
同　　同　　和田正蔵　印
同府同区同町

本の流通と書林の版権が、版木をめぐっての運営から、新技術の印行に変わる微妙な時期の動向を反映しているようである。それは、和歌の宗匠たちの立場そのものであるかのようである。

やはり、開化期の新規な企画に見えたものも、明治末期には、旧派と呼ばれてかぼそく消えていく。

では、「和歌麓の塵附録」から、いくつかをあげたい。

東京（1丁裏）

あつまなる　むさし野は　玉しきの　も丶しきや　むらさきの　さかえ行
君かます　そはみやこと　御代のはてなき　都となりて　限りしられぬ
富士をみやこの　花の東路　今そ栄行　雲井となりて
かねてより限りしられぬ野へなれは果なき御代の都とそなる　仝

鎮台（3丁裏）

世の守り　国の守り　もの、ふ　　馬車　　治れる　民やすく
うら安の
今そ名におふ　安国のはる　御世やすかれと　しつまるみくに
守りしすめて　世々久に　　世の民くさ　　御代久に
こゝろゆるさす　幾千代の国の守り　動かぬ御代の
　青柳の糸静かなる御代にも風の乱れを守るかしこさ

学校（4丁表）生徒
いとけなき　ならひ得て　をしへ草　小草　人となる
学ひする　つとにおき　書の鼓　ふみまなふ
みくにの文字　身のおこなひ　まかるこゝろを　こと国の文字
雪をあつめし　蛍あつめし　雪とほたる　親の名をあらはす
学ひのちから　こと国のをしへも　文学ふ殿
　ひらけ行世の民草の若苗はこの園にこそ栽へかりけれ　　読人不知
生徒　世に名ある翁草ともなりぬへし夕道を菊のわか苗　　芳樹（近藤）
同　　朝な〳〵学ひの道の霜をふみ雪をふみやに行はたか子そ
同　　みせはやな処かへける母と子に文みる道のひらけてし世を　厳夫

洋行（4丁表）

異国に　千さとの　海路へて　みくに出て　いくちさと　海原遠く
千里のうみ　ことのはの通はぬ　ひらけ行世は　みくにより異国かけて
やまとの国はふる郷のひと　かへりみる方は遥と　まなひ〳〵て
八重の潮路
　文の道ひらけ〳〵て行末はこと国までも通ふ人々　よみ人不知

士族帰農（4丁裏）
剣太刀とる手忘れて門田なるかゝしの弓をめにこそはみれ　よみ人不知

人力車　車夫（5丁表）
めくり行　人車　市町を　とくも行　乗人の　引めくり
雨に猶　こゑ高く　引れ行　幾里も　とくめくる
幾さとかけて　急くを常に　声かけて　冬も汗つく　乗人あれと
心ひかれて　おなし街を幾めくり　行へとひつゝ　人の行へを行へにて
　飛かける力車とおもひしは世の諸人の翼なりけり　長隣
　心より車引てやめくるらん引るゝ身ともなりなん親を　仝

蒸気車
たつけふり　みるうちに　乗るとみて　川の中みち

ゆきゝする道もたかはす　山をくゝりて　しはしはくらく　黒かねの道

郵便（5丁裏）

はしかき　玉つさ　いと早く　時のまに　雁の使は　かへし待にも
日を数ふれなは　何の力に　海山を　いかてかく　うたかふたより
千里の外も　こと国かけて　とみにつたへて　こたふる文も
日数重ねぬ　翼ある雁も及はし　遠き国をき帰も　昔もしらぬ
ひとひのほとに　はしる使も
　海山を隔つる里も隣かとおもふはかりの文の行かひ　よみ人不知
　翼ある雁も及はしかへりて聞くさへ早き文のたよりは　仝

写真（7丁表）

そのまゝに　写し得て　ものいはゝ　動きなは
画とはおもはす　人のおもかけ　かたらふはかり　とはゝこたへむ
　みるまゝに其人とのみおほゆれと動かぬにこそ写し画としれ　よみ人不知
　みれはたゝ語るはかりにおもほへて心もうこく人の面かけ　厚茂

新聞（7丁表）

その日こと　聞ゝ行て　告わたる　居なからにして　世のことしけく

つみももらさす　はや聞しりて　こと国かけて
　万代もかはらぬ御代にも其日毎かはりし事をみるはめつらし　読人不知

活版（7丁表）
　時の間に　いとはゆも　すりたてゝ　ことはのはやし　たれうゑそめて
　千々の言のは　世に告わたる
　　時の間に言の葉草をたれうゑてひらけ行世の花をみつらん　　仝

月琴（8丁裏）
　から歌を　唐人か　手ならす　引ならし　月のすかた
　声ある月　糸の四筋　うたふから歌　月をいたゝき
　くもらぬ月
　　雨雲は千里の空にちりてんと月に声ある夕たのしも　　よみ人不知

氷売（9丁裏）
　めつらしな　いかにかこひて　氷室のためし　冬を常なる
　　四の時いつとかわかむ厚氷うりかふ人は薄ものゝ袖　　長隣
　　富士のねの雪さへ消るみな月に氷うる世と成にける哉　仝
　　ひらけ行世は夏虫も市にうる氷に冬のありと知らん　　正養

屑買（11丁裏）

捨られし身はなけかしを屑も買とる人のあれはある世に　　読人不知

薬売（11丁裏）

さま〳〵に薬うるそと聞ゆ也老す死すの声も立てゝよ　　仝

「祝之部」を、4丁、十六の和歌題を設けているのは、『改正増補　和歌麓の塵』の購買者の利用目的に合わせた配慮だが、「四十賀」からはじまって、「五十賀」「六十賀」と続き、「百歳賀」まであげる。様々な「祝」があがるが、「職業の自由」「立身出世」と時代の風潮趨勢を反映した「開業祝」「昇進祝」などの題詠や歌題は、文明開化の歌書にふさわしいものであったろう。

むすび

『明治現存続三十六歌選』（明治十八年四月刊）には、東京を中心とした、歌人三十六人があがり、肖像画が載る。正・続の二編で、有賀長隣は、「続」に所載である。有賀長隣は、片膝を立て、片手に扇をひろげ、頭髪はオールバックの「ざんぎり頭」である。

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』に、有賀長雄が登場している。有賀長雄は長隣の長男で、大阪で種痘を受けた子供である。小説のクライマックスシーンの日本海海戦に登場する、大日本帝国海軍旗艦三笠に有賀長雄は軍人でなく、法律顧問の官吏として乗艦していた。戦地における国際法遵守、徹底させるために、ドイツ、ベルリン大学で学んだ有賀長雄にあたらせた。単なる戦闘シーンに筆を尽くすのではなく、軍人と動きをともにして、戦場のなかで国際法の運用に心を砕く若い官吏として

有賀長雄を点描のように書き入れている。

有賀長雄は、万延元年十月一日生まれ、大正十年六月十七日歿、号は、掃川、享年六十二歳。大阪英語学校から開成学校に進み、さらに東京帝国大学文学部哲学科に進む。東京帝国大学御用掛、東京帝国大学准教授、元老院御用掛、など公職を経て、明治十九年六月四日、元老院書記官となり、十一月からヨーロッパ留学、ドイツ、ベルリン大学、次にオーストリア、ウィーン大学でローレンツ・フォン・シュタイン教授から国際法を学ぶ。帰国後、国際法の権威とされて、明治期から大正期の日本の様々の法制度の調査補完にあたり、著書も多い。⑨

家学の和歌もよくして、和歌短冊をよく見かける。日清日露の戦役に詠んだ和歌の短冊染筆を乞われることが多かったと見えて、架蔵の二首書きの和歌短冊にも日露戦役の和歌がある。

旅順陣中に旧年を送り新年を迎へて　　長雄

せめ立つる弾をこよひの鐘にしていくさなからに年はくれ行

勝ちすゝむ国のほまれともろともにのぼる初日の光のとけき

馴れた詠みぶりで、旭日の国の勢威を、戦場の新年になぞらえて詠みこむ和歌も戦場の詠歌とあれば、臨場感にあふれた和歌に欲しがる人も多かったであろう。旧派の歌人は、和歌短冊の書式に通暁しているが、和歌二首短冊というと、初心の人には難しい。

また有賀長雄は、国際的にも評価が高い人物で、明治四十二年には、日本人初のノーベル平和賞候補にあがっている。⑩有賀長雄の弟の有賀長文は、実業家で、三井合名常務理事となった。明治四十二年に、三井合名会社を頂点とするコンツェルン体制が確立して、団琢磨首席、朝吹英二、波多野承五郎、有賀長雄、小室三吉、三井高泰の五人が参事にあたり、その一人が有賀長文であった。

『明治文雅姓名録』明治十六年版をみると、有賀長隣の住居は東京の「三番町六十七番地」と、あり、子供たちの近代教育の場は大阪から東京に移り一家で移住したことがわかる、長隣の妻の勝子は文政十二年五月六日生まれ、大正三年歿、享年八十六歳。

上方の旧派歌壇の歌人たちが老齢で消えていくとともに、有賀家のように江戸が東京と改まる中で積極的に、職業住居の自由を好機と捉え、東京という中央に進出の余力があるうちに、大阪から東京に活動の場所を移した有賀家は、子供たちに和歌の家学を伝えさせることではなく、新時代の教育を受けさせることで、官界と財界に進み家名をあげることに成功した。

有賀長隣の『改正増補　和歌麓の塵』は、地下堂上派歌学の最後の歌書とも言えようし、文明開化期の旧派の歌人達の意識がうかがえる歌書といってもよいであろう。長隣は有賀家七部の一つ『和歌麓の塵』という歌書を、『改正増補　麓の塵』と地下堂上歌学を新時代風にして世に送り、当時の時勢にあわせた。そして根本は、中世歌学の近世風の解釈と享受からの和歌創作であるから、景物や歌題を代えても、時代を追う開化和歌は、時代とのずれはなんともしがたいものがあった。むしろ、開化題の和歌は十数年程を経ると黴臭いものとなってしまっていた。

また、文明開化を詠んだ和歌から、リアルな幕末明治の歌人の、時代の雰囲気、情緒が伝わるのも事実である。和歌という詩形を自由に使いこなしたことには間違いないであろう。

注

① 森繁夫著『人物百談』（昭和十八年七月十五日刊、三宅書店）

② 管宗次・馬場憲二編『関西黎明期の群像』（２００５年5月20日刊、和泉書店）

③ ②に同じ。

④ 古西義麿「大坂の除痘館をめぐって」（有坂隆道『日本洋学史の研究』第六巻、昭和五十九年二月刊、創元社）

⑤ 浅井充昌「村井俊蔵と村井宗建宛・村井俊蔵書状をめぐって」（「堺女子短期大学紀要」38、1・18、2003年）

⑥ 緒方富雄著『緒方洪庵伝』（昭和三十八年三月二十五日刊、岩波書店）

⑦ ⑤に同じ。

⑧ 瀧井一博『伊藤博文　知の政治家』（中央公論社、中公新書、2010年刊）
我部政男・広瀬順皓編『国立公文書館　勅奏任官履歴原書　上巻』（柏書房、1995年刊）

⑨ 「有賀長雄著作目録」松山大学法学部伊藤信哉研究所、（外部リンク）

⑩ 「有賀長雄」（國學院大學21世紀COEプログラム国学関連人物データーベース）

（すが・しゅうじ　本学教授）